

# 父子関係と子供の社会化

杉 岡 直 人

1. 課題へのアプローチ
2. 調査の対象と方法
3. 父子関係の種類
4. 父子関係と子供の社会化
5. 結 語

## 1. 課題へのアプローチ

親子関係を扱った研究は数多く出されているが、多くは家族心理学、発達心理学からのアプローチによるものである。

中心テーマは臨床的な問題が多く、それだけ個々の家族の具体的な課題解決に対応する分析が必要とされたためと考えられる。とくに今日、子育て、少年非行、家庭内暴力など子供の発達段階における親の役割、あるいは親子関係の形成などについて論議されるようになり、まず母親論が母子関係を取りあげ、つづいて父親論もまた父子関係を問題にするという経緯をたどっている<sup>(1)</sup>。それは「父親不在論」を基調として母親論と関連づけるという傾向をみせているが、親子関係を社会学的アプローチで扱う場合、基本的に「日本の家族」を照準にした研究となる。

日本社会の親子関係のあり方を明らかにすることは、日本の家族を理解する上でどのような新たな知見を与えうるのかという関心によって位置づけられるといえるが、主たる内容はしつけ、養育態度に中心をおいたものが多い<sup>(2)</sup>。本研究では父子関係についてとりあげるが「父親不在」が「家庭での父親不在」を意味し、「役割喪失」を問題にするとき、父子関係は子供の社会化(=規範の内面化)にどのような影響を与えているかが問題となる<sup>(3)</sup>。現代の家族にとって求められる父親像とは何か、というテーマが今日混沌とした状況のもとで模索されているといえよう。

子供にとって同一化の役割モデルとして登場していた父親は、産業社会の進展にともなう職住分離傾向によって、働く姿を通じて子供の価値規範の内面化を支えてきた基盤を失っている<sup>(4)</sup>(ミチャーリッヒ、1972)ことはよく指摘されているところであるが、さらに構造的に把握しておく必要がある。そのためには親子関係を父子関係と母子関係と分類するだけでなく、夫婦関係をもくみこんで議論することが重要となる。すなわち、夫婦関係を規定する要因が父子関係および母子関係に影響を与えるという点を考慮する必要がある。たとえば日本社会の場合は、戦後の民法改正によってその制度的基盤を失った「イエ」の変容があげられるであろうし、「イエ」の成員によって維持されていた家族主義的観念の変容を認めなくてはならない。それは高度経済成長期を通して核家族化が進展したことによってますます加速化されることになり、併行して発達した大衆社会化と情報社会化のなかで伝統的価値体系の変化をみるに至った。このことは、一方において婦人(女性)の社会的地位の向上に伴う夫婦関係の変容にもかかわってくる。その背景としては義務教育修了後、上級学校への進学率が上昇し、男女間の学歴の差が小さくなったことが大きな要因と考えられる。学歴差が小さくなったことは情報蒐集機会において差がなくなったことと、同時に相手(男性)の情報蒐集源を認知したことによる神秘性の排除が女性の男性に対する権威的イメージの排除につながっていったといえる。また労働力市場のなかに女子がパートを含めて組みこまれながらも職場進出<sup>(5)</sup>をはたし、男性社会としての職場に対して認識を深めていくことができたことは、男女の力関係に大きなインパクトを与えることになったのである。加えて、生涯学習活動も盛んになっており、女性にとって男性との対等意識の浸透につながっている。このほか、よく指摘されるように自由時間の増加もまた女性の社会的地位の向上にむすびついている。とくに食生活におけるインスタント食品、冷凍食品、ファストフードの普及、惣菜の家庭配達の利用、および料理、掃除、洗濯などの各種電化製品の普及はかつてとは比較にならないほどの自由時間を生み出している<sup>(6)</sup>。

こうして、女性の職場進出や社会的参加の機会を拡大を通して夫婦関係における女性の発言力も強くなり、以前の固定された父親像の変化を生み出していると考えられる。それは「父親不在」が母親によって親子

関係のある種の補完がなされ、母親が父親の代替的機能を果しているという問題があらわれている。事実、「母子密着」という表現はあっても「父子密着」という言い方はされないので、母親の方がより子供との接触も多いこと、そして父親不在の延長上に父親役割が問われるという結果をもたらしている。

日本の研究では「父親イメージ論」が多く、深谷昌志は「パートナー型の両親像」を強調している<sup>17)</sup>。両親の役割接近を招いた要因として、深谷は、女性サイドの要因として(1)母親の高学歴化による同一学歴夫婦の増加、(2)育児の社会化にともなう余暇時間の増加とその結果としての学習型余暇の充実、をあげている。また父親サイドの要因には(1)家制度の崩壊による権威を法的に守られた父から生物学的父への変化、(2)豊かな社会の到来による父親の収入の重みの低下、(3)民主主義的な考え方の浸透による父親の特別扱いの変化、(4)価値観の流動する社会を迎えているため、子供に対する価値観の継承がむつかしい、と指摘している。

さらに両親の同質化は「男女の差異を拡大するような社会的強制力が弱まれば共通性が増加する」のは当然の帰結とし、子供たちからの父親に対する同一化志向の強さを示して、いわゆる「父親の復権」はさほど問題にならないとする。ただ、子供の両親に対する依存性の強さは、親の学習面での能力が高いためもあり、親に対する能力評価の高さによって支えられ、やさしい父親に対しての反撥も生じにくく、「なだらかな反抗期」を示す要因となり、「自立の遅れ」を親の適切な働きかけによってカバーされておらず、動機づけをする父親役割の必要性を指摘している<sup>18)</sup>。

前述したように本稿では親子関係のなかでも父子関係に注目して、従来の父親イメージ論と異なる父子間接触をベースにした父子関係論を展開することを企画したが、文献的に限界もあり、アメリカにおける研究例を参考とした。親子関係そのものは発達心理学を中心とした分野で取り上げられることが多いが、視点はかなり多岐にわたっており、Waltersらが1960年代のレビューを試みたものは17項についてまとめている<sup>19)</sup>。もっともこの分類は彼自身の表現によれば、かなり便宜的(arbitrary)な性格をもたざるをえないとしている。また親子関係の研究を困難にしている理由には、independent-dependent variablesの設定の仕方がむつかしいことと、縦断的調査が必要な点を指摘している。彼は70年代を展望し

て、親子関係研究の13の課題を提出している<sup>(10)</sup>。それは1) 子供の行動の多様性を母親の類型よりも父親類型ともっと密接に関係づけること、2) 事実に対するラベリングを行為分析から区別すること。3) 父子関係(とくに父娘)の重視、4) 家族研究者と臨床家との共同による家族理論の発展、5) 家族の相互作用、縦断的研究調査の促進、6) 実践的な問題解決に対する関心をたかめる、7) 共同研究調査による国際的レベルのサンプル調査の実施、8) 親子関係にかかわる関連した変動を広い範囲で設定すること、9) 社会学の変数よりも心理学の変数の重視、10) 親子関係を形成する積極的、満足すべき方法を学習すること、11) 非規範的家族構造のタイプを明らかにする、12) 老親子関係の心理学的、情緒的側面の重視(経済的援助や訪問パターンに力点をおくよりも)、13) 調査技術の向上、などである。Walters はさらに10年後に1970年代の方法論上のイシューを中心にレビューを試みているが、これは1960年代の親子関係研究を整理した際に指摘していることとほぼ同様の論点を強調したものとなっている<sup>(11)</sup>。とくに、1) 単一次元モデル(親→子)による調査から互酬的モデル(親↔子)への転換や2) 親子間の相互作用をより広いコンテキストから研究することの重要性、3) 子供の行動に対する心理学的な影響力を扱う研究が進められていることなどである。

また、父親研究の重要性を指摘しているが、その背景として70年代に急速に増加した離婚の結果、子供に与える父親の影響に注目するようになったこと、そして10年前に信じられていた以上に父親が子育てに参加するようになってきていることが指摘されている。いわゆる *mothering* と *fathering* をあわせて *parenting* という表現が用いられるようになってきたのは、こうした父親役割への評価が検討されてきたことの1つの成果といえよう。

本研究の目的は、父親が役割モデルとして位置づけながら現代では一般的に影響が小さいとの評価を受けている父親が、子供の社会化に対して如何なる関わりをもっているかという問いに対する一つの試みとして、従来取り上げられなかった父子間接触と父親の権威を軸とした父子間の規範意識の比較を通して子供の社会化(規範の内面化)過程における父親の役割を明らかにしようとするものである。

## 2. 調査の対象と方法

現代家族の親子関係というテーマをとり上げるにあたり、総理府青少年対策本部が1979年に実施した『国際比較 日本の子供と母親』（国際児童年記念調査）を参考とし、全国データとの関連をとらえるため、学年を小学4年～中学3年までの児童とし、加えて、母親だけではなく父親をも対象とした<sup>(12)</sup>。

調査地の1つに、札幌市のベッドタウンとして昭和45年以降急速に宅地化が進んだ広島町を選定した。その理由は新興住宅地区、農業地区、混住地区あるいは分譲住宅地区と大規模な公営賃貸住宅地区など、地区類型が多様であり、また各地区が分散立地していることから地域特性の問題にする上でも適切であると考えたからである。とくに各地区の形成過程が異なり、人口の変動も著しいことから、コミュニティ意識やインフォーマルネットワークの態様も異なることが指摘されており、昭和45年に道営北広島団地の建設がなされてからは、混住化現象とそれをもたらすコンフリクトをかかえながら著しい変貌をとげつつある<sup>(13)</sup>。

ここで、広島町の沿革についてふれておくと、1884（昭和17）年、広島県よりの移住団体（18戸）の入殖がなされたのを開基とし、昭和43年8月15日に町制施行を迎えた。この頃、北海道では、札幌市の真駒内地区および江別市大麻地区の両団地に次ぐ第3の道営団地造成のための検討を開始していた。すなわち、札幌市の人口増加とそれともなう住宅供給を札幌圏の内部で40km圏を通勤地区として候補地の選択がなされており、広島町のほか、朝里地区（小樽市）、東山地区（岩見沢市）、南島松地区（恵庭市）、真駒内地区（札幌市）などが候補地に上がっていた。昭和43年11月に道議会において、8000戸規模の道営団地の造成が広島町を対象として決定し、昭和45年3月に実施計画が策定され、大麻団地の2倍となる面積440haの道内最大規模の団地となった。

まず、人口構造についてとりあげるなら図1に示すように、戦後から昭和44年までは約8,000人の人口と世帯数1,500にとどまっていたものが、昭和45年には9,746人（21.4%増）と急速に上昇しはじめ、昭和40年時点の人口（8,022人）、世帯数（1,679）を指数100とすると、人口について

は昭和45年に121となり、昭和50年には278、さらに昭和55年に至っては426となり、15年間に4倍をこえていることがわかる。世帯数についても昭和40年を100とすると昭和45年に140となり、昭和50年には369、さらに昭和55年には621と6倍をこえている。

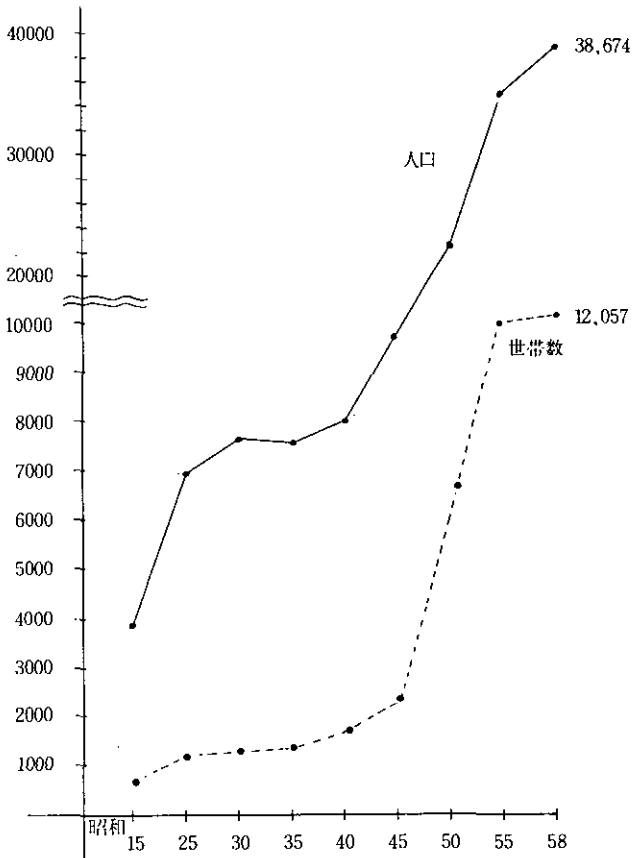


図 1 人口と世帯数の変化

注) 国勢調査および住居基本台帳(昭58)による。

## 父子関係と子供の社会化

また、産業別人口の変化について表1により構成比をみると昭和50年には第1次産業13.2%（うち農業12.7%）、第2次産業27.2%（うち建設業11.5%、製造業15.1%）、第3次産業59.4%（うちサービス業24.2%、卸・小売業16.9%、運輸通信業7.4%、公務7.0%）であったが、昭和55年には第1次産業7.3%（うち農業7.0%）、第2次産業24.6%（うち建設業10.8%、製造業13.5%）、第3次産業67.8%（うちサービス業29.7%、卸・小売業18.1%、運輸通信業7.6%、公務8.0%）となり、農業の占める割合が半減していること、サービス業の増加が著しいことに示されるように第3次産業の構成比が全体の2/3を占めており、昭和50年にくらべて約1割の増加をみている。

ところで、われわれが対象とする小・中学生の生徒数について、その変化をみるために表2に示すように昭和50年を100とすると、3年後の昭和53年には約1.6倍、さらにその3年後には約2倍に増加しており、いかに人口増加がライフサイクルの初期に相当する30～40代の核家族を中心に進んできたかがうかがえる。

調査対象母集団総数は、昭和57年5月現在で小学4年～6年生計2,283人、中学生1,816人、計4,099人である。サンプリングは地区特性を考慮した比較分析が可能なように確率比例抽出法を用い、学年別・性別構成が均等になるように設定し、計362組の親子を抽出した。

調査方法は、親に郵送留置調査を行ない、親の調査票をうけとったときに子供の調査票を依頼し、数日後に回収するという留置調査法を用いた。これは親、子双方に互いに対する評価について質問したため両者の回答を別々にする必要があったからである。回収結果は、いずれの地区も回収率が8割を越えており、全体では87.8%（318組、うち父親98人、母親220人）であった。調査不能は、44票であり、その主な理由は拒否28（63.6%）である。

調査は昭和57年7月に第一次調査を、昭和58年3月及び8月に補足調査を実施した。分析の手順は、1）父子関係の類型を父子間の接触量と操作的に与えた父親の権威の有無を軸として設定し、2）その特性を属性、PFテストおよび父親観、母親観によって明らかにした上で、3）父子の規範意識の相関を父子関係の類型ごとに検討し、さらに父親と母親の規範が子供の性別によってどのように子供に内面化されているかを明

らかにする。

表1 産業別人口の変化 (単位:人・%)

区 分	昭 和 50 年		昭 和 55 年	
	総 数	構成費	総 数	構成比
就 業 者 総 数	9.171	100.0	13.641	100.0
第 1 次 産 業	1.213	13.2	995	7.3
農 業	1.167	12.7	954	7.0
林業・狩猟業	37	0.4	38	0.3
漁業・水産業 養殖業	9	0.1	3	0.0
第 2 次 産 業	2.493	27.2	3.364	24.6
鉱 業	55	0.6	50	0.3
建 設 業	1.054	11.5	1.470	10.8
製 造 業	1.384	15.1	1.844	13.5
第 3 次 産 業	5.449	59.4	9.246	67.8
卸売業・小売業	1.554	16.9	2.470	18.1
金融・保険業	198	2.2	297	2.2
不 動 産 業	59	0.6	108	0.8
運 輸 ・ 通 信 業	675	7.4	1.040	7.6
電気・ガス・水道 熱供給業	97	1.1	192	1.4
サ ー ビ ス 業	2.222	24.2	4.048	29.7
公 務	644	7.0	1.091	8.0
分類不能の産業	16	0.2	36	0.3

注) 国勢調査による。



表2 小学生・中学生の生徒数の推移

	小学生	指数	中学生	指数
昭和50年	2,176人	100	841人	100
53年	3,423	157	1,347	160
56年	4,402	202	1,630	194
58年	4,803	221	2,001	238

注) 教育委員会資料による。

### 3. 父子関係の類型

父子関係を父子間接触と父親の権威を軸に類型化し、いわば父親類型論を展開することを通して、現代の父親が子供の社会化に与える影響について考察するわけだが、その手続きとしていくつかステップを重ねなくてはならない。

まず、1) 父親と子供の接触について7項目を設定した。それらは、(イ)学校のできごとを話す、(ロ)友だちのことを話す、(ハ)勉強について話す、(ニ)朝食をいっしょに食べる、(ホ)夕食をいっしょに食べる、(ヘ)いっしょに遊ぶ、(ト)散歩・買物をいっしょにする、といった会話と食事、外出、遊びを中心にしたものである。相談などについては、別にたずねており、会話、接触との相関も高いことが考えられるので除き、接触内容のバランスを配慮した。また、父子間接触度として7項目の接触をそれぞれ各1点として、最低0、最高7点の接触量(インデックス)を求め、表3に示すように接触量および接触項目相互の相関マトリックスを作成したところ、接触量と接触項目との相関は高く、インデックスとして適当なことが認められた。ただ、朝食と夕食については、時間帯の異なる父子が多いためか、やや低い相関となっている。「学校のできごとを話す」こどもは、「友だちのこと」も話し、「いっしょに遊ぶ」傾向が強い。また、「勉強について話す」こどもは「学校のできごと」を話したり、「友だちのことを話す」「散歩・買物をいっしょにする」が「いっしょに遊ぶ」ことはやや少ない。これは、中学生になって勉強について父親との会話

が多くなる一方で、小学生のときほど父親と「いっしょに遊ぶ」ことが多くないことにつながっているであろう。「朝食」と「夕食」は他の接触項目との相関はみられないが、お互い同士は相関がみられ、朝食も夕食もスレ違いの父子が目立つことを表わしている。「いっしょに遊ぶ」ことが「散歩・買物をいっしょにする」こととそれほど高い相関を示していないのは、散歩・買物行動が「いっしょに遊ぶ」ことがなくても「買物」へは（いっしょに）行くというような家族行動としておこなわれていることをうかがわせる。

ここで接触量について度数分布をみたところ、0～2までが50.3%であるのに対し、3～7までは分散していたので前者を接触度の低いグループ、3～7までのグループを接触度の高いグループとし、接触内容との関連をみた（表4）。

表4によれば食事をしたり、勉強について話をする割合は、比較的両グループの差が小さく、「学校」や「友達」のことを話すこと、あるいは「いっしょに遊ぶ」ことの差は大きいといえる。また、同じ「食事」でも「朝食をいっしょに食べる」のは「夕食をいっしょに食べる」よりも接触量で表わした2つのグループの差が大きい。

接触との関連で「あなたはお父さんといろいろなことを話しますか」（会話）および「何か困ったことがあるときはお父さんに相談しますか」（相談）という質問とのクロスをとると表5に示すように接触量が多いグループは父親・母親とのコミュニケーションも多く、同時に父親と母親との差も「接触量の少ない」グループにくらべて小さいことがわかる。また、表6は2つのグループの父子間の評価とその差についてみたものである。これによると「相談」（子供に対しては父親に相談するかをたずねており、父親に対しては子供が（自分に）相談すると思うか、という質問になっている）については、2つのグループの父子の評価は、1）接触量の多いグループほど父子ともに肯定する割合は高く、2）両グループの差をとると父親よりも子供の方により差が大きく表われている。それだけ親の認識にズレがみられるといえるが、「理解」の項目についても同様の傾向がみられる。この質問は、子供に対しては「お父さんは理解してくれていると思いますか」とたずね、父親には「お子さんのことをよく理解していると思いますか」とたずねている。結果は1）接触量

表3 父子間接触の相関行列

接触量	学校	友だち	勉強	朝食	夕食	遊ぶ	散歩・買物
接触量	.665**	.656**	.588**	.411**	.434**	.620**	.560**
学校		.556**	.334**	.042	.018	.452**	.229*
友だち			.333	.0	.068	.430**	.214*
勉強				.082	.036	.203*	.291**
朝食					.289**	.049	.089
夕食						.120	.128
遊ぶ							.279**
散歩・買物							

父子関係と子供の社会化

表4 父親との接触度と接触内容

単位：%

接 触 度	接 触 内 容	学 校 の で き こ と を 話 す	友 達 の こ と を 話 す	勉 強 に つ い て 話 す	朝 食 を い つ し よ に 食 べ る	夕 食 を い つ し よ に 食 べ る	い つ し よ に 遊 ぶ	散 歩 ・ 買 物 を 一 緒 に す る	計
多 い		68.9	54.8	55.9	62.1	74.0	47.5	58.8	58.4
少 ない		11.1	11.9	20.6	30.2	50.0	6.3	15.9	41.6
合 計		44.9	37.0	41.3	48.8	64.0	30.4	40.9	100.0

の少ないグループと多いグループの父親の差はみられないが、2) 子供同士の差は大きく、加えて、3) 接触量の少ないグループでは親子間のズレが小さい。したがって、子供の側からの評価が高い接触量の多いグループの父親は「理解」に対する自己評価が低くだけ親子接触に対する規範が強く働き、その結果として接触量が多いという一面を示しているといえる。

ところで、父子関係にかかわるもう1つの軸として「権威」の問題があげられる。「権威 (authority)」は「権力 (power)」と異なり、相手からの支持を前提にしていることから、操作的に権威の存在を考え、子供が父親に対して「自分のことをよくわかってきている」と答えたものを権威が成立するために必要な信頼感の存在が認められるものとして権威の指標とした。むろん、他に複数のカテゴリーを設定することも考えられるが、本稿では接触と権威の組合せによる父子関係のタイプを設定することを出発点としているので、できるだけ簡便な取り上げ方をした。いま、表7に示すように「接触量」と「信頼感」の組み合わせを設定すると以下のようなものである。

A型：接触量が多く、子供も父親に理解されていると感じているタイプ。このタイプの父親は、つとめて子供に接することを心がけており、子供からも慕われている（理想の）「現代的父親」タイプといえる。

B型：接触量は少ないが、子供は父親に理解されていると感じているタイプ。このタイプの父親は子供に対して多少距離をおいているようだ

父子関係と子供の社会化

表 5 会話と接触量

単位：%

父親と の接触量	対 象 者		相 談	
	父 親	母 親	父 親	母 親
多いグループ	77.0	93.3	61.2	82.5
少ないグループ	22.8	56.8	15.0	46.1

が、子供からは慕われているという「伝統的父親」タイプといえる。

C型：接触量は多いが、子供は父親に理解されていると思わないタイプで、A型と対照をなすと考えられる子供の側の反撥を含んだ「過保護」あるいは「過干渉」な父親タイプとみなしうる。

D型：接触量は少なく、子供も理解されていないと感じているタイプで、このタイプの父親は子供には比較的「放任型」父親に近いタイプと考えられる。

以上、4つのタイプは、仮説的に父親の「権威」と「接触」を中心とした類型であるが、この類型化にもとづく父子関係および子供の性格特性、行動様式、父子間の規範意識についてとり上げることにする。以下、A～Dのタイプについてはネーミングによる混乱をさけるため単にA型、B型、C型、D型とする。

まず、父子関係の類型と接触内容との関連について表8にもとづき整理する。この場合A、C型とB、D型がそれぞれ比較の対象となる。すなわち、A型、C型ともに父親との接触は多いが、「勉強」について話したり「遊ぶ」こと、「散歩・買物」などの行動を一緒にする割合が少ない。また、B型とD型については接触が少ないことを共通にしているが、子供が（親に）「理解されている」と思っているかどうかについての違いにより分類している。その結果は、B型は「勉強について話す」ことが多い。「いっしょに遊ぶ」こともD型より多いが、食事を一緒にすることは少ない。

ここで、父子関係の類型と属性との関連についてふれておくと、学年、性別をのぞいて有意差はみられない。ただ「職業」別に傾向をみると、公務員にはA、B型の割合が比較的多く、教員はB型の割合が他よりも多い。また、会社員はA～D型まで分散しているがD型の割合が高い。

表6 接触頻度と父子間の評価のズレ 単位：%

対象	接触度の多いグループ		接触度の少ないグループ		多いグループの父・子のズレ	少ないグループの父・子のズレ
	父(A)	子(a)	父(B)	子(b)	A - a	B - b
相談	75.4	61.2	61.4	15.0	14.2	46.4
理解	46.6	85.7	47.6	41.0	-39.1	6.6

表7 父子関係の類型設定

理解	接 触 量	多	い	少	な	い
	有		A		B	
無		C		D		

表8 父子関係の類型別にみた接触内容 単位：%

接 触 内 容 類 型	話す 学校の できごとを	友 達の ことを 話す	勉 強に ついて 話す	朝 食を いっし よに	夕 食を いっし よに	い っし よに 遊ぶ	散 歩・ 買物 を一 緒
	A	70.0	56.4	60.0	61.4	72.9	52.9
B	11.8	13.2	23.7	22.4	47.4	9.2	15.8
C	64.5	51.6	48.4	61.3	77.4	29.0	51.6
D	10.6	10.6	14.9	40.4	55.3	2.1	17.0

「学歴」については、中学校卒は分散しているが、高等学校卒はややA、B型の割合が高く、短大卒はC型が、大学卒ではD型の割合が多い。「年収」については「400万未満」層ではD型が他よりも多く、「550万以上」層ではB、C型が多いという傾向がみられる。有意差のあった学年、性

別の子供の構成比をみると、A型は小学生が多く、性別では女子の方が多いこと、B、C型は分散しており、D型は中学男子、女子の割合が多い。また父子接触の多いのは男子よりも女子の方であることはA型、C型にみられる特徴である（表9）。

ところで、仮説的に設定したA～D型の4つの父子関係の類型のもつ特徴を整理する必要がある。

図2はYGテストの簡易版<sup>(14)</sup>を用いて内向性－外交性および適応・情緒安定性を2軸に、性格特性の位置を示したものである。「広島町」の子どもは「全国調査」の結果よりも外向性は強く、神経症的性向もやや強い。A型は「全国調査」の値よりも外交性が強く、B型は「広島町」（全体）にほぼ等しい。C型はD型と同様、神経症性向がやや強いが、D型よりも外交性の値が高いのが特徴である。したがって、他の型よりもやや情緒安定性に欠けているといえよう。

図3は父子関係の類型別に父親観と母親観についてまとめたものである。これは、例えばA型の子供が父親と母親に対してどんなイメージを抱いているかを示したものである。さきにA型は「現代的父親」型、Bは「伝統的父親」型、C型は「過保護」型、D型は「放任」型と設定したが、その特性が両親に対するイメージとどのような対応関係にあるのかを考察する。まず、A型の場合、B型と同様どちらかといえば「やさしい」父母のイメージがあらわれており、全体としてAとBの相違は少ないが、会話（「話す」）や「相談」はB型よりも多く、直接的な接触を通して父子関係が形成されている。

B型は、具体的な接触はA型にくらべて少ないが「（父親と同じような人間に）なりたい」という同一視や「尊敬」の気持はA型と同様強く、伝統的な父子関係のモデルを示している。

C型は父親との接触は多いが親に理解されていないと思っているタイプであるが、「やさしい」父母のイメージは強く、とくに母親がA、B型にくらべて「きびしい」が少ないことから母親とよく話しているが、父親に対する「なりたい」という同一視の感情や「相談」は少なく、「尊敬」の気持も接触のあまりないB型にくらべて約2割少ない。このことは接触が多くても子供に内面的に受け入れられないケースとして過保護・過干渉の親のイメージを与える。

表9 父子関係の類型別にみた属性

単位：%

		A	B	C	D	全 体
職  業	農 業	4.2	6.1	14.8	0.0	5.0
	自 営 業	12.5	4.5	14.8	6.1	9.5
	公 務 員	19.2	19.7	14.8	14.3	17.9
	教 員	6.7	10.6	3.7	6.1	7.3
	会 社 員	57.5	59.1	51.9	73.5	60.3
学  歴	中 学 校	20.5	25.0	23.1	23.1	22.3
	高 等 学 校	63.0	61.8	57.7	51.9	60.1
	短 大	5.5	2.9	15.4	5.8	5.9
	大 学	11.0	10.3	3.8	19.2	11.7
年  収	400万未満	28.6	23.7	25.8	35.1	28.3
	400万 ～550万未満	33.6	26.3	32.3	24.6	29.9
	550万以上	27.1	36.8	32.3	29.8	30.6
	無 回 答	10.7	13.2	9.7	10.5	11.2
学 年 ・ 性 別	小学生男子	30.7	27.6	22.6	15.8	26.3
	中学生男子	15.0	28.9	22.6	40.4	24.0
	小学生女子	35.0	18.4	25.8	15.8	26.3
	中学生女子	19.3	25.0	29.0	28.1	23.4



父子関係と子供の社会化

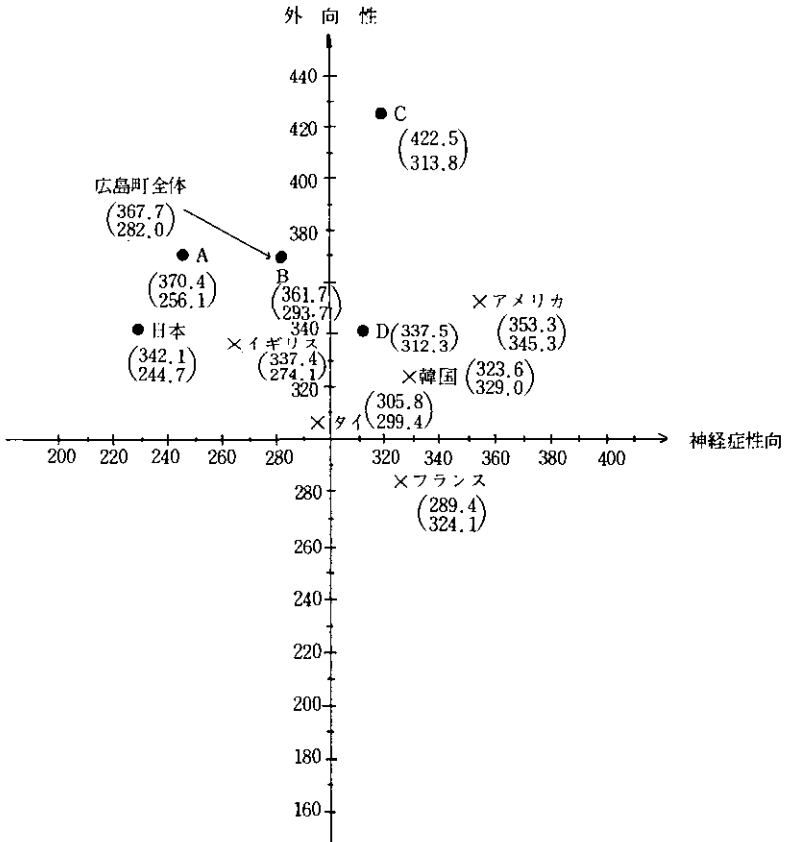


図2 YGテストによる性格特性

注) 国別の数字は『国際比較日本の子供と母親』昭和55年、第1-31頁(74頁)による。

( )内の数字は、上段：外向性、下段：神経症的性向の比率である。

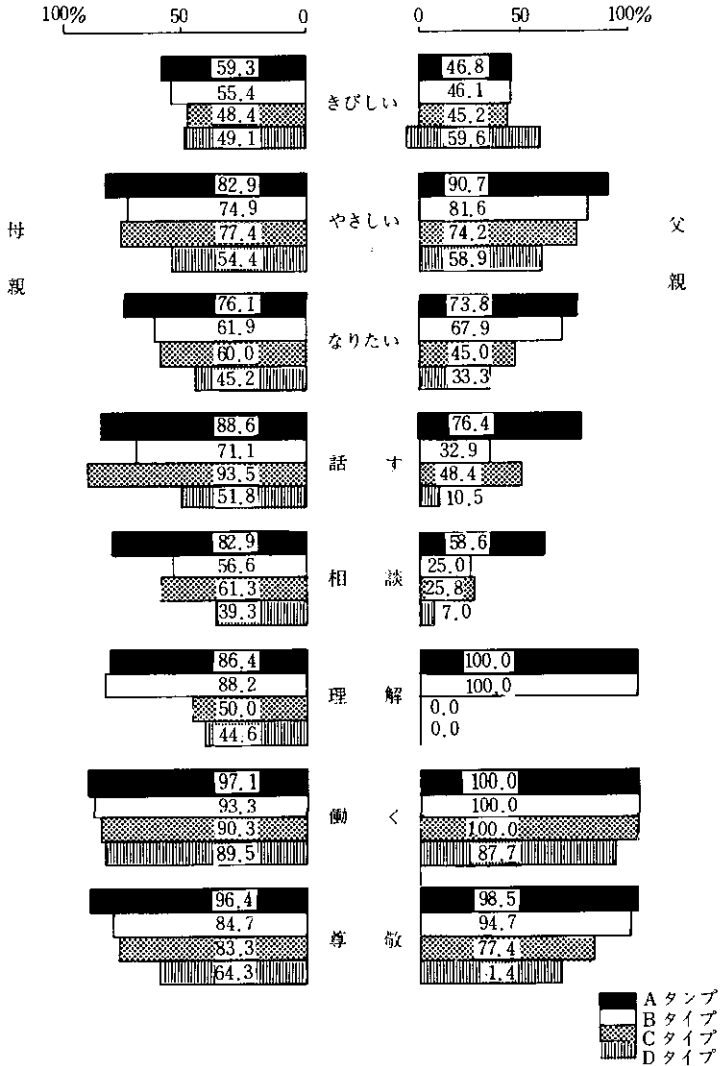


図 3 父子関係の類型別にみた父親観・母親観

最後にD型は、他に比べて「きびしい」イメージと「やさしい」イメージの差がほとんどなく、それだけ相対的に「きびしい」親として評価されていることを示している。この型は「会話」や「相談」の頻度も極端に低く、すべてについて低いイメージをあらわしている。

#### 4. 父子関係と子供の社会化

これまで父子関係の類型を中心に考察してきたが、父子関係をテーマにする以上、社会化の問題と切り離して考えることはできない。すなわち、規範（意識）の内面化（制度化）過程が社会化を構成しており、父親類型論も親子関係における規範意識の相互性を別にして扱うことは殆ど意味をなさないであろう。

表10は、子供の規範意識と父親の規範意識の割合と両者のズレを示したものである。全体的にみるといずれの型も父親より子どもの規範意識の方が強い。ここで父親の規範意識というのは表現の正確性を欠くことになるので付言する必要がある。質問文は「あなたが調査対象のお子さんと同じ年ごろの子が『絶対にしてはいけない』と考えているものがありましたらいくつでもあげてください」というもので、親自身の問題についての規範意識ではないので子供の規範への期待とみなすのが妥当であろう。

親と子の規範意識の強さを比較すると、全部で12項目のうちA型では9項目、B型では6項目、C型では9項目、D型では7項目についてそれぞれ子供の規範意識の方が強い。『国際比較日本の子供と母親』では日本の特徴として、親子とも「両親のいいつけに従わない」「先生のいうことにしたがわかない」「友だちとけんかする」の禁忌度が低く、「うそをつく」「約束を守らない」ことについては親の禁忌度より子供の禁忌度がかなり低いことが指摘されているが、本調査においても父親と母親の相違はあるが表10にみるように同様の傾向がみられる<sup>(15)</sup>。

全体としてみると父親の規範意識は子供のそれを下廻っているが、「うそをつく」では子ども66.7%に対して父親71.4%であり、「約束を守らない」は子ども53.8%に対し父親65.9%となっている。しかも、この2つの規範項目についてはA～D型の4つのタイプのいずれをとっても父親

表10 父子関係の類型別にみた規範意識

単位：%

	A		B		C		D		A	B	C	D	全体	
	父	子	父	子	父	子	父	子	父-子	父-子	父-子	父-子	父	子
1. 両親のいいつけに従わない	37.1	52.8	35.7	32.1	62.5	85.7	15.0	31.8	△15.7	3.6	△23.2	△16.8	34.1	44.1
2. 友だちとけんかをする	22.2	22.2	14.3	14.3	0.0	28.6	15.0	31.8	0.0	0.0	△28.6	△16.8	9.9	22.6
3. タバコをすう	74.3	94.4	57.1	82.1	50.0	71.4	60.0	72.7	△20.1	△25.0	△21.4	△12.7	63.7	83.9
4. 学校をさぼる	68.6	97.2	67.9	78.6	62.5	71.4	75.0	59.1	△28.6	△10.7	△ 8.9	15.9	69.2	80.9
5. ポルノ(エロ)映画などをみる	57.1	77.8	42.7	82.1	50.0	71.4	60.0	77.3	△20.7	△39.2	△21.4	△17.3	52.7	78.5
6. うそをつく	77.1	72.0	71.4	67.9	75.0	57.1	60.0	59.1	5.1	3.5	17.9	0.9	71.4	66.7
7. 先生のいうことに従わない	34.3	61.1	25.0	39.3	62.5	71.4	20.0	31.8	△26.8	△14.3	△ 8.9	△11.8	30.8	48.4
8. 夜遊びをする	38.6	80.6	64.3	67.9	50.0	71.4	65.0	45.5	△42.0	△ 3.6	△21.4	19.5	62.6	67.7
9. 酒をのむ	74.3	91.7	46.4	75.0	50.0	71.4	50.0	54.5	△17.4	△28.6	△21.4	△ 4.5	58.2	76.3
10. 約束を守らない	65.7	58.3	67.9	46.4	75.0	57.1	60.0	54.5	7.4	21.5	17.9	5.5	65.9	53.8
11. 万引きをする 人のものを盗む	85.7	100.0	89.3	89.3	100.0	85.7	85.0	90.9	△15.0	0.0	14.3	△ 5.9	87.9	93.5
12. きまったBF・GFとつきあう	2.9	25.0	17.9	10.7	0.0	28.6	20.0	4.5	△22.1	7.2	△28.6	15.5	11.0	16.1

の値が子供のそれを上廻っており、父親の規範意識が子供のそれより強いのはこれら2つに限定されている。これらのほかに父親が強く規範としてもっているのは「万引きをする」(87.9%)、「うそをつく」(71.4%)、「学校をさぼる」(69.2%)、「約束を守らない」(65.9%)などであり、子どもの規範については「万引きをする」(93.5%)、「タバコをすう」(83.9%)、「学校をさぼる」(80.6%)となっている。どの型の父子についても子どもの規範意識が親のそれよりも10%前後多いものには「タバコをすう」、「ポルノ映画などをみる」「先生のいうことに従わない」などがあげられる。

タイプ別の特徴を整理するならば、接触量の多いA型は父親の規範意識も子供の規範意識も比較的強く、とくに注目すべきなのは子供の規範意識が父親よりも強いことである。一方、同じく接触量の多いC型では父子ともに規範意識はA型よりも弱く、「うそをつく」の規範はA型よりもかなり低い。また、A型とC型では「権威的」な規範を示す「両親のいいつけ」や「先生のいうこと」に対する父親の規範意識についてはC型のほうが強いという差がみられるが、これはC型の過保護的態度と過干渉的態度との間にみられる共通した側面を表わしているといえ、子どもに対する働きかけが頻般になされるにもかかわらず、子供が親に理解されていると思っていないC型の場合、親の態度に権威主義的な性格が表われることは不自然なことではない。いわゆる「小言の多い」親はこのタイプに該当するといえよう。

また、接触量の少ないB型とD型についてみると、B型の父親はA型、C型の父親にくらべると規範意識はそれほど強くないが、子供の規範意識はA型について強い。またB型の親子の差がA型、C型の差にくらべて小さいことが指摘される。この点で伝統的な父親モデルを形成している。

D型については「約束を守らない」「うそをつく」という項目については親子とも規範意識が弱い。親子の規範意識のズレも他にくらべて少ない。また、父親は「両親」や「先生」のいうことにしたがわかない、という点についての規範意識は子供に対してそれほど強くもっておらず、子供との規範意識のズレの小さいことが社会化に関する影響力を表わしているといえよう。少なくとも父親の規範意識が弱ければ、子供の規範意

識を強めることはないと考えられる。

ところで、父子関係をベースにした規範意識の問題は父親の子供の規範意識の形成に与える影響力を評価することになるが、そのためにはいくつかの手続きにより父親の規範意識の特性を明らかにする必要がある。表11によりまず、1. 父親と母親の規範意識の差をみるならば、一般的な逸脱行為（たとえば「たばこをすう」「夜遊びをする」「酒をのむ」など）に対する規範については、どちらかといえば母親の方に傾斜しているが、親や教師などとの権威的關係をあらわすものや、対人関係レベルの規範については父親の方が強い。そこで、さらに男子と女子の比較を試みるならば、父親と母親との間にみられた相違にほぼ対応しており、とくに一般的な逸脱行為に対する規範については女子が確実に男子を上廻っている。したがって父親のもっている規範は男の子へ、母親のもっている規範は女の子へと内面化されていることが考えられるが、より厳密には親の性別と子供の性別のクロスをとって相関をみなくてはならない。男の子の父親と母親の規範および女子の父親と母親の規範の比較をおこなったところ、男の子については全体として父親の規範との対応関係が強く、一方、女子の親の場合、男子の場合にくらべてかなり値が低いが、父親の方は権威關係と対人関係規範が強く、一般的な逸脱に関しては圧倒的に女子の母親の規範が強いことが認められた。以上の分析から親子の規範意識の関連はつぎのようにまとめられる。

1) 父親は「権威關係」および「対人關係」の規範、そして母親は一般的な逸脱に関する規範を分有している。

2) 男の子と女の子の規範意識にみられる特徴は、男の子は父親と同様「権威關係」および「対人關係」の規範意識が女の子にくらべて強く、一方、女の子は母親と同様に「一般的逸脱關係」規範において男の子よりも強い。したがって男の子と女の子の規範意識の差は父親と母親のそれに対応している。

3) しかも、父親は男の子へ、母親は女の子へそれぞれの規範を継承させているといえる。

4) 加えて、父親は男の子より女の子に甘く、母親は子供の性に左右されていない。ただ、「一般的逸脱關係」規範の、女の子に対して母親のもっている規範の影響力はかなり強い。

表11 性別にみる親子の規範意識の比較

		父親	母親	p	男子	女子	p	男子の 父親	男子の 母親	p	女子の 父親	女子の 母親	p
		権 威 係	両親のいいつけ	34.7	> 17.5	**	45.9	> 39.1	・22	38.8	> 11.9	**	27.7
	先生のいいつけ	31.6	> 22.7	△	50.3	48.7	・77	42.9	> 20.8	**	17.0	< 24.3	・31
対 人 関 係	友だちとけんか	12.2	> 5.7	*	21.0	19.9	・80	12.2	> 5.0	△	8.5	6.5	・66
	うそをつく	70.4	< 77.3	・19	61.1	> 57.7	・53	79.6	77.2	・74	59.6	< 77.6	*
	約束を守らない	65.3	> 53.6	△	53.5	> 48.1	・33	71.4	> 52.5	*	57.4	54.2	・70
逸 脱 行 動 関 係	たばこ	63.3	67.8	・43	84.7	< 89.7	・18	67.3	67.3	・99	57.4	< 68.2	・19
	学校をさぼる	67.3	67.3	・99	74.5	< 80.8	・18	73.5	> 63.4	・21	59.6	< 71.0	・16
	夜遊びをする	62.2	66.8	・43	65.6	< 82.1	**	71.4	67.3	・61	51.1	< 66.4	△
	酒をのむ	58.2	< 61.6	・56	73.9	< 87.2	**	65.3	61.4	・64	48.9	< 61.7	・14
	万引・人のものを盗む	85.7	87.2	・71	89.8	< 94.9	△	89.8	87.1	・63	80.9	< 87.9	・25

\*\* = p < .01

P : X<sup>2</sup> 検定の有意水準

\* = p < .05

△ = p < .10

## 5. 結 語

本稿では、現代家族の親子関係のなかでとくに父子関係を取りあげ、規範意識の内面化としての社会化について父親と子供の規範意識の対応関係を分析の対象とした。

1. これまで、日本における父親に関する研究は父親イメージ論を中心に展開しており、父子関係そのものをとらえた議論はほとんどみられないのが現状であるが、われわれは父親の役割を問題にする場合、父親の権威を射程に入れた分析を必要とする考え、①父子間の接触量の多少と②子供の父親に対する信頼感の有無を組み合わせ、A. 接触量が多く、子供の信頼も得られている「現代的父親」タイプ、B. 接触量は少ないが子供の信頼を得ている「伝統的父親」タイプ、C. 接触量が多いが子供の信頼を得ていない「過保護の父親」タイプ、およびD. 接触量が少なく、子供の信頼も得ていない「放任型父親」タイプの4つの類型を設定した。

仮説的には、A、B型は子供の社会化にプラスの影響力をもち、C、D型はマイナスの影響力をもつといえるが、YGテストの結果もA、B型の子供にくらべて、C、D型は神経症性向が強く、情緒的安定性に欠ける傾向がみられた。

2. また、父親観と母親観に関してみると、A型の子供は「やさしい」両親のイメージをもち、親との会話や相談もB型より多い親子関係を形成している。B型の子供は接触は少ないが、父親のようになりたいたいという「同一視」や「尊敬」の気持はA型と同様に強い。C型の子供はA、B型にくらべて「きびしい」イメージが弱く、「同一視」の感情や「尊敬」の気持もB型にくらべて弱い。D型の子供は相対的に「きびしい」親のイメージをもっているが、「会話」や「相談」の割合も低く、すべてについて他のタイプよりも低いイメージを示している。

3. 親(父)子の規範意識については、子供の社会化の影響力の視点でとらえた。全体として子供の規範意識は親のそれを上廻っているが、父親の方が上廻っている項目は「うそをつく」と「約束を守らない」であり、A～Dの4つのタイプのいづれをとっても父親の方が子供よりも



強い規範を示している。

タイプ別の特徴をみると、A型は父子ともに規範意識は強く、B型の場合は子供の規範意識がA型について強い。また父子間の規範意識の差がA、C型にくらべて小さい。C型は同じく接触量の多いA型にくらべて全体として父子ともに弱い、「権威的」関係に関する「両親」や「先生」については、C型の親の規範意識は強い。D型については父子間の規範意識のズレは他にくらべて小さく、しかも弱いという特徴をもっている。したがって、父子関係の類型を父親の権威を操作化して設定した結果は、規範意識における権威との関係を表わすことになり、子供の社会化（規範の内面化）にとって父親の権威のあり方が重要な要因となっていることが捉えられた。

4. また父子関係のもつ意味を考える上で母子関係を含めて規範意識を分析すると、①父親は「権威関係」及び「対人関係」規範を、母親は「一般的逸脱関係」規範を分有していることがわかる。② この①の特徴は男の子と女の子について規範意識を比較した場合も同様であり、父親は男の子へ、母親は女の子へそれぞれの規範を継承させているといえる。③加えて父親は男の子より女の子に甘いが、母親の規範は子供の性に左右されない。

以上、本研究により導かれた結果についてまとめたが、父親の権威が子供の社会化に与える影響が大きいことと、父親と母親では規範の内容が異なり、父親→男子、母親→女子へと規範の継承ルートが形成されている点で「父親存在」の重要性が指摘しうる。

今後の父親研究の課題としては、当面以下の2点を掲げておく。1) 父子関係と母子関係の関連をとりあげること。これは同一家族内の三者関係調査は困難であるがアメリカでも父子関係、母子関係の dyad 関係を問題にすることから父—母—子の三者関係 (triad) への展開が強調されており、関係のダイナミクスを重視すべき段階を迎えているといえる。2) その際、親子関係を単一次元でとらえるのではなく、親のコミュニティ意識や社会的ネットワークなど親子関係を従属変数として関連した要因 (relevant factors) を体系的に捉えていく必要がある。これらは別稿にて取り上げていく予定である。

註

- (1) 我国の場合、父親についてはまだ調査研究の蓄積が少なく、まとまったかたちでの論文も限られており、本研究のテーマである規範の問題を扱ったものはほとんどないのが現況である。ただ一般書の文献は比較的出そろっており、以下のものが参考となる。

『児童心理』第30巻第10号(特集 父親の役割)金子書房 1976。

『児童心理』第37巻第1号(特集 子供にとって父親とは)金子書房 1983。

『児童心理』第36巻第3号(特集 よい親の条件)金子書房 1982。

「父親に関する主要参考文献」

人生読本『父親』河出書房新社 1979 259~270頁。

佐々木孝次『父親とは何か』(講談社新書420)講談社 1982。

朝日生命保険相互会社編『いま、父親は子供に何ができるか』日本経営出版会 1982。

木村 栄『父親の自立と子育て』汐文社 1982。

山村賢明『日本の親・日本の家庭』金子書房 1983。

依田明・小川捷之『父親』(現代のエスプリ No96)至文堂 1975。

一方、アメリカではかなり父親研究が進んでおり、文献の体系的レビューをおこなったものには David B. Lynn. *The Father His Role in Child Development*, Wads Worth Publishing Company, Inc 1978, (D. B.リン「父親その役割と子供の発達」(今泉信人他訳)北大路書房 1981)

Michael E. Lamb (Ed.) *The Role of the Father in Child Development* (2nd ed.) John Wiley & Sons, New York 1981 があるがこのほか本研究に関わる主な論文として以下のものがあげられる。

Acock, A. C and Vern, L. B. Socialization and attribution processes: Actual versus perceived similarity among parents and youth. *Journal of Marriage and The Family*, 1980, 42(3), 501~515.

Acock, A. C and Vern, L. B. On the relative Influence of mothers and fathers: A covariance analysis of political and religious socialization. *Journal of Marriage and The Family*, 1978, 40(3), 519~530.

Baker, L. G. Changing religious norms and family values. *Journal of Marriage and The Family*, 1965, 27(1), 6~13.

Bowerman, C. E. and John. W. K. Changes in family and peer orientation of children between the fourth and tenth grades. *Social*

- Forces*, 1959, 37(3), 206~211.
- Brittain, C. V. Adolescent choices and parent-peer cross-pressures. *American Sociological Review*, 1963, 28 385~391.
- Calonico, J. M. and Darwin, L. T. Role-taking as a function of value similarity and affect in the nuclear family. *Journal of Marriage and The Family*, 1973, 35(4), 655~665.
- Connell, R. W. Political socialization in the American family: The evidence re-examined. *Public Opinion Quarterly*, 1972, 36(3), 323~333.
- Devereux, E. C. Socialization in cross-cultural perspective: comparative study of England, Germany and the United States. In Hill, R. and Rene, K.(Eds.), *Families in East and West*. Mouton, 1970.
- Dreyer, A. S. and Mary, B. W. Parental values, parental control, and creativity in young children. *Journal of Marriage and The Family*, 1966, 28(1), 83~88.
- Harter, C. L. and Vestal, W. P. Maternal preference of socialization agent for sex education. *Journal of Marriage and the Family*, 1968, 30(3), 418~426.
- Holland, D. Familization, socialization, and the universe of meaning: An extension of the interactional approach to the study of the family. *Journal of Marriage and The Family*, 1970, 32(3), 415~427.
- Floyd, H. H. and Donald, D. R. Dilemma of youth: The choice of parents or peers as a frame of reference for behavior. *Journal of Marriage and The Family*, 1972, 34(4), 627~634.
- Jennings, M. K. and Kenneth. Mothers versus fathers: The formation of political orientations among young Americans. *The Journal of Politing*, 1969, 2, 329~357.
- Johnson, C. M. and Alan, C. K. Family norms, soical position, and the value of change. *Social Forces*, 1964, 43(2), 149~156.
- Lynn, D. B. The process of learning parental and sex- role identification. *Journal of Marriage and The Family*, 1966, 28(4), 466~470.
- Nelson, J. Marital norms and individualistic values: A study of social conditions affecting consistency. *Journal of Marriage and The Family*, 1967, 29(3), 475~482.

- Nye, F. I. Values, family, and a changing society. *Journal of Marriage and The Family*, 1967, 29(2), 241~248.
- Peterson, G. B. Richard, N. H. and Larry, R. P. Interaction of family development and moral stage frameworks: Implications for theory and research. *Journal of Marriage and The family*, 1979, 41(2), 229~235.
- Smith, T. E. Foundations of parental influence upon adolescents: An application of social power theory. *American Sociological Review*, 1970, 35(5), 860~873.
- Wright, J. D. and Sonia, R. W. Social class and parental values for children: A partial replication and extension of the kohn thesis. *Fertility in Latin America*, 1976, 41(3), 527~537.
- Yost, E. D. and Raymond, J. A. Parent-child interaction and changing family values: A multivariate analysis. *Journal of Marriage and The Family*, 1974, 36(1), 115~121.
- (2) 松原治郎・佐藤カツコ編『しつけ』(現代のエスプリNo.113)至文堂 1976。  
柏木恵子「子どもの発達における父親の役割」『現代のエスプリ』142, 至文堂 1979, 66~91頁。  
木田淳子「父親の育児参与と幼児の発達に関する調査研究」『滋賀大学教育学部紀要』No.31 1981。  
窪 龍子・青柳幸子・高野 陽「父親の育児に関する認識と実践について」(1)(2)『日本総合愛育研究所紀要』第17.18集 1981, 1982, 37~47頁, 53~58頁。  
山田英美「父親と育児—そのかわりの実態と問題点」『山梨大学教育学部研究報告』30巻19号 1979 151~162頁。  
総理府青少年対策本部編『国際比較 日本の子供と母親』(国際児童年記念調査最終報告書) 1981。  
総理府青少年対策本部編『国際比較 青少年と家庭』1982。
- (3) この点については、以下に展開するように産業化の進展とともに父親が家庭からひき離されたという面での「不在」の問題と、父親の家族内地位が母親の地位の向上にもなって相対的に低下し、かつ夫婦関係も対等になってきている現状の下で、父親役割を改めて問い直さざるをえないという2重の「不在」(喪失)問題を前提にする必要がある。
- (4) Alexander Mitscherlich Auf Dem Weg Zur Vaterlosen Gesellschaft R. Piper & Co. Verlag 1972 (アレクサンダーミッターリッヒ『父親

なき社会』小見山実訳 新泉社 1972。

- (5) 昭和57年就業構造基本調査によれば、主婦の就業率は女子全体の就業率を上廻り、50.8%となり3年前(昭和54年)よりも4.2ポイント増加している。

とくに、子育てが一段落した35～54歳の中年層は61.8%に達している。業種別にみるとパート、アルバイトに占める主婦の割合は79%である。働く主婦の内訳をみると正規雇用は60%、35%がパート、アルバイトとなっている。女子の就業率の上昇について、総理府では①不況のため企業が男性よりも主婦パートを採用する傾向と②主婦の社会進出意欲が盛んになっていることを指摘している。(1983.7.11.朝日新聞)

- (6) 図式的には深谷昌志(註7)参照)をはじめとする他の論者の解釈に異論はないが、最大の要素として夫婦関係における女性の対等意識が強くなったことが指摘されるのではないかと考える。

- (7) 深谷昌志「第二次反抗期の喪失と父親のあり方」『孤立化する子どもたち』(NHKブックス436)日本放送出版協会1983 226～251頁。

同様の論点は以下の文献にも指摘されている。

深谷昌志・深谷和子『現代子ども論』有斐閣双書 1975。

- (8) (7)

- (9) Walters James and Nick Stinnett. Parent-child relationships: A decade review of research. *Journal of Marriage and The Family*, 1971, 33-1. 70～111.

- (10) ibid, 102～103.

- (11) Walters James. Parent-child relationships: A review, 1970-1979. *Journal of Marriage and The Family*, 1980, 42-4, 807～822.

- (12) 研究全体の枠組は、親子関係を核にして親のコミュニティ意識および社会的ネットワークの問題、子供の集団参加を中心にしており、父子関係はその一部を構成するものである。また、調査地域は地域特性を考えて複数選定している。

- (13) 岩城完之「大都市近郊における地域社会変動と自治体労働者」『産業と教育』(北海道大学教育学部)第3号, 1983, 11～56頁。

- (14) 総理青年対策本部編 前掲書, 1980, 42-4, 807～822.

- (15) 同上書 67～77頁。

#### [附記]

本研究の実施については広島町の対象者の方々をはじめ、以下に掲げる関係

の方々の特段の御配慮をいただいたことに対し厚く謝意を申し上げる次第である。

広島町教育委員会教育長(現町長)小野田徹雄氏, 社会教育課長 鈴川曼氏, 社会教育主事 堀 正彦氏, 社会教育課係長 羽田野高正氏他関係各位。

また, 調査協力者として各自のテーマをもって取り組んでくれたゼミの学生諸君に感謝したい。テーマの1つに父子関係を取り上げることになったのも前田美咲君の「父親不在」への強い関心によるものであり, また遠藤清芽君には日本社会福祉学会第31回大会(於北星学園大学1983.9.23)での共同報告の労を煩わせた。

なお, 本稿は昭和58年度文部省科学研究費一般研究(C)による研究成果の一部をなすものである。

計算作業には北海道大学大型計算機センター(HITAC-M200)のSPSSプログラムを使用した。